

April 26, 2026

喜び・御霊の実 詩篇 126:5-6

126:5 涙とともに種を蒔く者は／喜び叫びながら刈り取る。

126:6 種入れを抱え 泣きながら出て行く者は／束を抱え 喜び叫びながら帰って来る。

来月ペンテコステを迎えるにあたって、私たちは「御霊の実」について学びはじめました。先週は、「愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制」は、イエスが持っておられる性質で、私たちが信仰によってイエスにつながっているとき、イエスの命が私たちのうちに注ぎ込まれ、「愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制」などが、果物の実のようにして私たちのうちに結ばれていくことを学びました。

一、真理

聖書は「愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制」を「御霊の実」、つまり、「聖霊が結ぶ実」と呼んで、霊的なことがらを自然界のことでたとえています。イエスは「わたしはぶどうの木、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人にとどまっているなら、その人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないのです。」（ヨハネ 15:5）と言われました。枝が実を結ぶためには幹につながっていなければなりません。そのように、私たちが「御霊の実」を結ぶためにはイエスにとどまっていることが必要です。

では、「イエスにとどまる」とはどうすることでしょうか。イエスは言われました。「あなたがたがわたしにとどまり、わたしのことばがあなたがたにとどまっているなら、何でも欲しいものを求めなさい。そうすれば、それはかなえられます。」

（ヨハネ 15:7）「わたしのことば」とあるのは、イエスの教え、神の言葉、真理のことです。真理である神の言葉から迷い出ることなく、それを守ることです。道端や岩だらけの土地、茨の茂ったところに落ちた種は成長することも、実を結ぶこともありませんが、よく耕された良い地に蒔かれた種は、何十倍、また、百倍もの実を結びます。そのように、私たちの心から、頑固さや疑い、誘惑や思い煩いなどをとりのぞいて、砕かれ、へりくだった心で神の言葉を受け入れ、多くの実を結びたいと思います。

二、愛

イエスにとどまり実を結ぶために「真理」と並んで大切なのは「愛」です。イエスは「父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛しました。わたしの愛にとどまりなさい」

（ヨハネ 15:9）と言われました。また、「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合うこと、これがわたしの戒めです」（ヨハネ 15:12）と言われ、神の愛を知る者たちが互いに愛し合うことを命じられました。人は、真理だけでは生きられません。ある子どもが父親に言いました。「お父さんの言うことはいつも正しい。けれども、ぼくが間違えたとき、お父さんはぼくを責めるだけで、少しもいたわってくれなかった。」何が正しいことかを知るだけでは、それを行う力にはなりません。私たちは失敗や過ちの多い者たちです。失敗や

過ちを犯したときもなお赦し、受け入れてくれる愛によって、失敗や過ちを乗り越えて進むことができますのです。私たちは、毎日、思い煩ったり、落胆したりします。そんなとき、そこから私たちを引き上げてくれるのは、思い煩い、うちしおれている私たちをそのまま包み込んでくださる神の愛です。また、その愛によって祈り、支えてくれる信仰の仲間なのです。

植物でたとえれば、御言葉の真理は地面から吸い上げる養分のようなものです。そして、愛は陽の光に相当します。太陽の光が届かないところでは、そこがどんなに栄養分のある土地であっても、植物は育ちません。根があっても、光が遮断されるとそれも死んでしまうのだそうです。雑草が生えるのを防ぐために、光を遮断する黒いシートを敷くのはそのためです。私たちに注がれる神の愛の光が届かなければ、イエスからの命は私たちのうちで育たないのです。ひまわりの花は太陽の方角を向いて咲くといわれます。私たちも、どんなときも、神の愛に向かい、神の愛を感じとりながら成長し、実を結ぶものになりたいと思います。

三、試練

キリストにつながる枝である私たちが実を結ぶためには、イエスは御言葉の真理と神の愛が必要なことを教えてくださいましたが、なお、もう一つの大切なことを教えておられます。ヨハネ 15:2 でイエスはこう言われました。「わたしの枝で実を結ばないものはすべて、父がそれを取り除き、実を結ぶものはすべて、もっと多く実を結ぶように、刈り込みをなさいます。」イエスが言われた「刈り込み」というのは、「剪定」のことです。実を結ぶのに妨げとなる枝を切り取ることで、それは、神

から与えられる試練や訓練を指します。

特別なワインを作るために栽培するぶどうは、あまり肥えた土地でないと植え、これでもかというほど徹底的に鋏を入れて枝を切り取るのだそうです。そんなふうに通めつけられるようにして育ったぶどうほど、甘い実を沢山実らせると聞いたことがあります。私たちの父なる神は愛の神で、太陽のように私たちを温めてくださるのですが、同時に、私たちに容赦なく鋏を入れ、私たちを夏は日照りに、冬は冷たい風にさらすことがあります。それは私たちの人生に訪れる様々な試練のことです。

私たちが大切にしていたもの、生きがいだと感じていた仕事、また愛する人が取り去られるとき、「神さま、どうしてなんですか」と、恨みごとを言いたくなることがあり、「これは神さまからの罰なんだ。私はもう神さまに愛されなくなったのだ」と、神の愛を見失うこともあるでしょう。けれども、そうしたことは、神が私たちを愛しておられないからではなく、むしろ、もっと深く愛して、私たちをもっと多くの実を結ぶ者とするための神からの「訓練」なのです。それは神の怒りの罰ではなく、神の愛の訓練です。ヘブル 12:7に「訓練として耐え忍びなさい。神はあなたがたを子として扱っておられるのです」とあるように、試練のときも、神の愛を忘れないようにしたいと思います。

「風が吹くと木が育つ」という言葉があります。私は、これは人生のことを言っていて「人は逆境の中で強くなる」という意味で、実際の樹木にはそんなことは起こらないと思っていました。というのも、ダラスでは、強い風が吹くときが多く、私の家の周りの木の枝が折れるのを見てきたからです。一昨年

（2024 年）の 5 月の末にはバックヤードの木の大きな枝が倒れ、その木はとても弱くなってしまいました。今年の 3 月にも風のため少し大きな枝が折れました。けれども、調べてみると、「風が木を育てる」というのは、比喻ではなく実際のことだと知りました。木の枝が風に揺られることで木は幹や根にごく細かな傷を作ります。それを修復する過程で組織が強くなり、より太く強い根を張るようになります。また、風にさらされることによって、木は折れないように内部組織を密にし、緻密な年輪を作り、堅い木になるのです。

また、植えたばかりの苗木には支柱を立てますが、ある程度育つと支えを外します。すると風に当たることで、木は根を張る力が強くなり自立するようになります。全くの無風状態では、木はストレスを感じるので、軟弱に育ってしまうのだそうです。これは、子どもを育てるときの教訓にもなりますね。子どもは護ってやらなければなりませんが、あまりにも過保護で温室育ちにすると自立できなくなるかもしれません。父なる神も、私たちが自分の足でしっかり立ち、人生を歩むことができるように、時に試練の風を送って、私たちを強くしてくださるのです。

聖書は「私の兄弟たち。様々な試練にあうときはいつでも、この上もない喜びと思いなさい」（ヤコブ 1:2）と教えていますが、それでも試練が喜びになるには時間がかかることが多いと思います。喜びに至るまでには涙を流さなければならないことがあるのです。そんなとき、きょうの御言葉を覚えましょう。「涙とともに種を蒔く者は／喜び叫びながら刈り取る。種入れを抱え 泣きながら出て行く者は／束を抱え 喜び叫びながら帰って来る。」（詩篇 126:5-6）苦勞して田畑を耕し、種

を蒔けば、必ず、収穫の時が来て抱えきれないほどの麦の束を手にするようになります。そのように、様々な困難なときも、神の愛を信じ、キリストにつながっているなら、必ず、「御霊の実」を結ぶことができるのです。涙の種は、喜びの実となって返ってきます。そのことを信じて、試練を、苦しみを、困難を、悲しみを乗り越えていきましょう。

（祈り）

父なる神さま、あなたが私たちの目から涙を拭い、苦しみや悲しみを喜びに変えてくださることを感謝します。イエスが教えてくださった実を結ぶための秘訣を常に心に覚えて、キリストにつながり、御霊の実を結ぶ者となれますよう、私たちを助けてください。まことのぶどうの木であるイエス・キリストのお名前です。